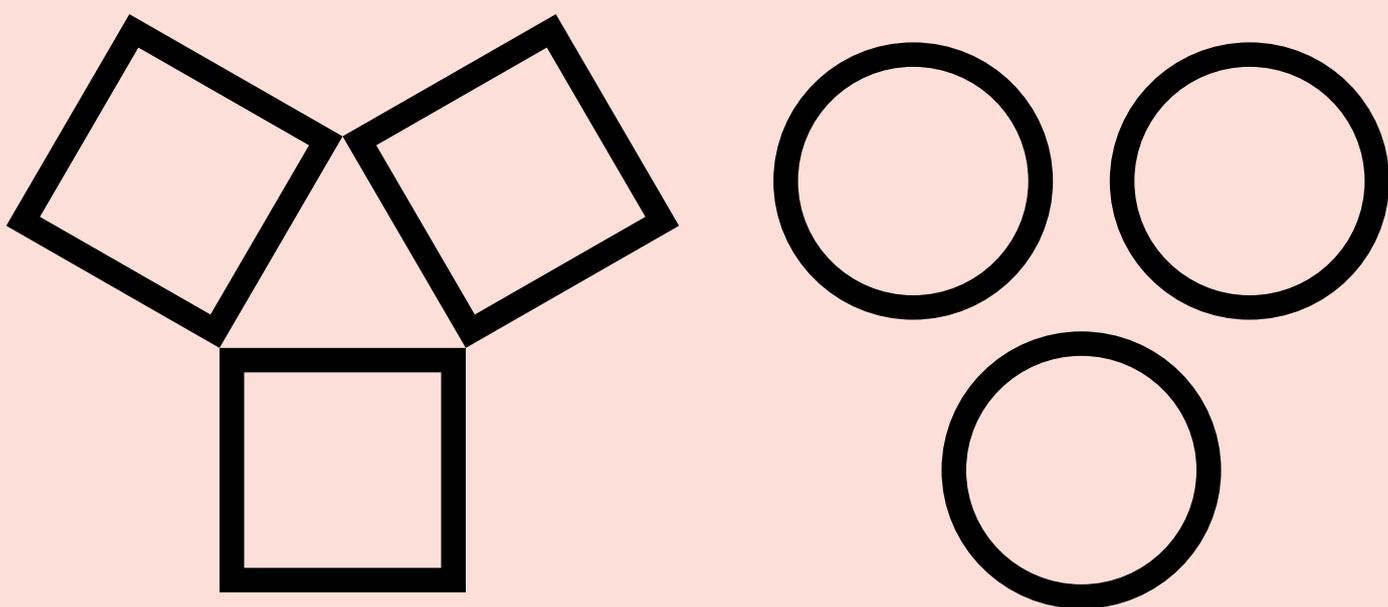
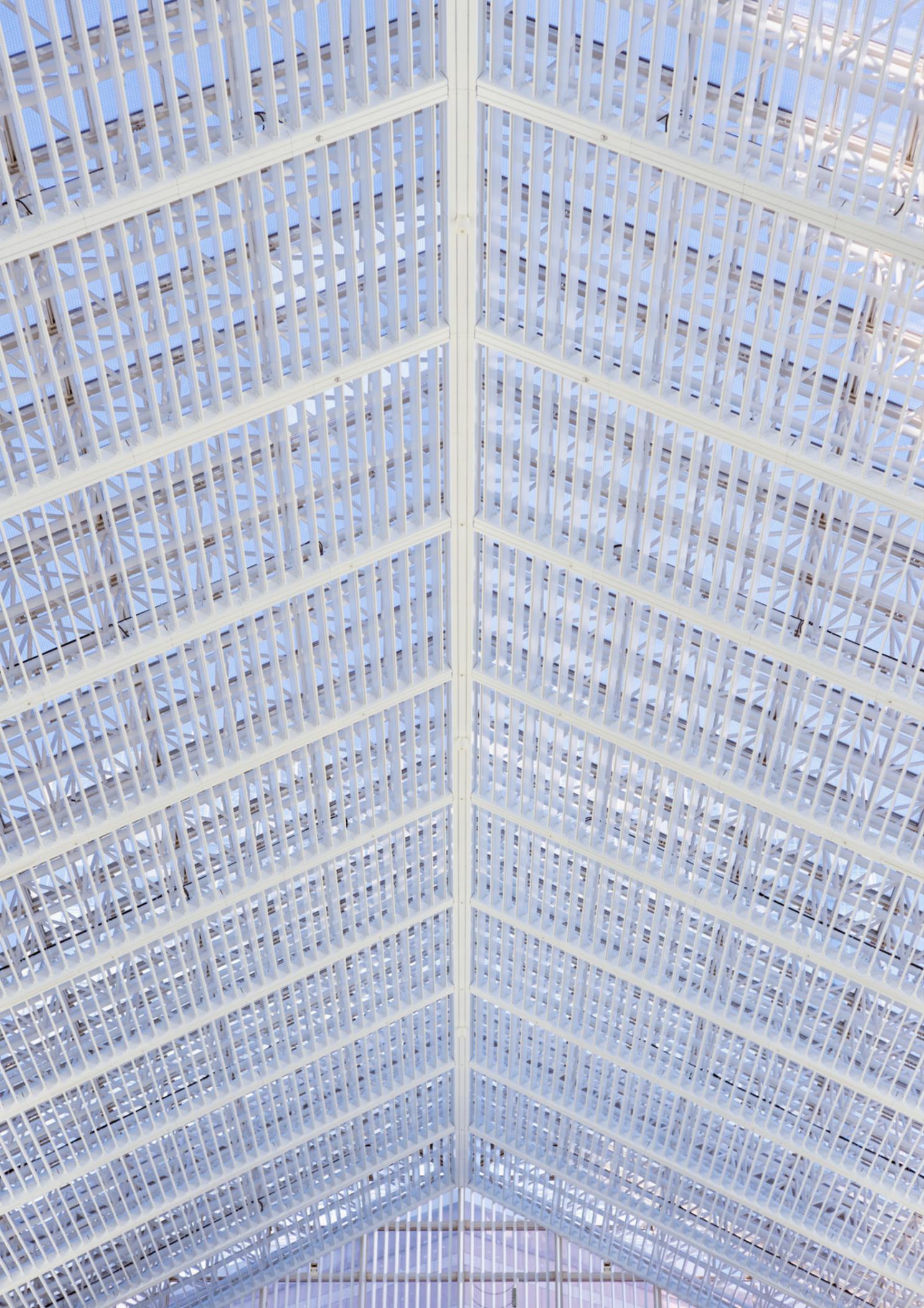


みちとが、ひらく
THE PORT IS OPEN



横浜美術館
YOKOHAMA
MUSEUM OF ART



みなとが、ひらく

美術館は、港のようだと思います。

どんな人も歓迎する。

来るもの、出るもの、多様な文化や価値観が交錯する。

今と過去と未来を中継する。

バリアもボーダーも飛び越えていく。

そして、世界にひらかれた港町の美術館として

歩んできた私たちは、さらに思うのです。

ここに訪れるすべてのあなたもまた、港なのだ。

自由な出会い。豊かなまなび。自分らしくいられる時間。

みて、つくって、まなんで。見晴らしのいい気分で、

未来へ針路をとるために。

たとえ時代が変わっても、今日という暮らしのそばで

横浜美術館は、

あなたという港がひらく場でありたいと思います。

5つの願い

1. 誰もが尊重され、自分らしくいられる場でありますように
2. 人、もの、考えとの新たな出会いの場でありますように
3. 今日を生きるよろこびを感じる場でありますように
4. このよろこびが、美術館から街へと広がりますように
5. ひとりと、地域と、世界がつながる場となりますように



横浜美術館は、2021年3月より2024年3月まで、開館以来初となるお休みをいただき、大規模改修工事を行いました。

リニューアル後の横浜美術館は、どんなところかどのように新しくなるのでしょうか。

3年にわたる休館中、わたしたちは検討プロジェクトを立ち上げ、これからの美術館の姿について考えました。

たどり着いたのは、いまやどの美術館、博物館にも求められる「多様性」という課題に、横浜らしいやり方で応える、という結論です。

世界に開かれた貿易港である横浜には、さまざまな人が訪れ、新しい文化や情報が次々ともたらされます。

新しいものに出会うと、わたしたちは不安や驚きを覚えます。しかし、こころとからだをやわらかくして自分とは異なる声に耳を傾けるとき、自分の世界がぐっと広がるのを感じます。相手の世界もまた、こちらに向かって大きく広がります。そこには、互いに異なる存在であることを認めながら、それでも共にいるための空間が生まれるのです。

アート作品は、異なる時代や地域に生きるひとびとが、いろいろな考えに基づいてつくったものです。また、ひとつの作品の中にも多種多様なメッセージが込められています。たくさんのものの見方に触れるための手がかりとして、アート作品ほどふさわしいものはないのです。

こんな理想を実現するため、今回具体的に力を入れたのが、広大なエントランスホールである「グランドギャラリー」と、美術館の前に広がる「美術の広場」に面した諸施設により構成される「じゅうエリア」の整備です。

たとえば、広場からも中のように見えることのできるガラス張りのギャラリーを新設しました。また、これまで3階にあった美術図書室を地上階に移し、広場から気軽にアクセスできるようにしまし

た。グランドギャラリー内にエレベーターを1基増設したことで、ベビーカーや車いすでの館内移動もいっそう快適になります。グランドギャラリーは、誰もが思い思いにくつろぐことのできる空間となるよう、什器等を新たに仕つらえました。カフェやショップも生まれ変わります。

こうしたハード面の整備は、「新たなものに出会い、それを受け入れる場」となる第一歩として、まずは多様な方々に美術館へ足を運ぼうと思っていただくための、いわば土台の部分です。

この土台の上に、わたしたち一人ひとりがどのような態度でお客さまをお迎えするか、というソフトの面が加わって、美術館ははじめて理想に近づきます。この態度に基づき、どんな作品や書籍を収集するか、どんな展覧会を企画するか、どんなワークショップやトークを行うかといった、美術館のすべての活動が組み立てられます。

高い理想を掲げましたが、その実現は一朝一夕に成るものではありません。これから長い航海に出るわたしたち、横浜美術館の新しい船出を、どうぞ見守ってください。

2024年1月
横浜美術館 館長
蔵屋美香



思い思いに過ごせる「じゅうエリア」

横浜美術館を象徴する大空間「グランドギャラリー」を中心とする無料エリアは、より自由でひらかれたエリアとなって生まれ変わります。あらゆる人を歓迎し、どんな人の居場所にもなる、そんなひらかれた美術館を象徴するポイントをご紹介します。



ガラス張りの天井

開閉式ルーバーの改修工事を行い、設計者・丹下健三の当初の構想が復活したことで、季節や時間によって天井からやわらかい自然光がふりそそぐ大空間を感じられるようになりました。

カフェ、ショップ

美術の広場に面した居心地の良い空間を生かして、横浜ならではのカフェとオリジナルグッズを扱うショップがリニューアルします。カフェやショップのみのご利用も大歓迎です。(2024年11月オープン予定)

館内外サインの一新

開館から30年以上のあいだにつくられたさまざまな案内表示。今回の改修工事を機に、誰もが理解しやすく、追加や変更が容易なものにサイン類を一新しました。キーワードは「変化」と「ひらくこと」です。



まるまるラウンジ

オリジナルの机や椅子で、作品や建築を見ながら、カフェの飲みものやおしゃべりを楽しめるエリアが誕生します。(2025年2月以降予定)



大階段エリア

左右対称にひろがる階段の踊り場のかたちに着目し、横浜美術館の建物のおちこちに見られる「まる」と「しかく」をかくしテーマにした彫刻作品を展示します。作品を囲みながらおしゃべりをしたり考えをめぐらせたり、教育普及やアトリエの活動も身近に感じられるようなエリアになります。(2025年2月以降予定)



展示フロアにつづく無料エリア

展示室前のホワイエまで無料エリアを拡張。グランドギャラリー全体を見渡しながら、子どもからおとなまで、誰もが自由に過ごせる場所です。ワークショップを行ったり、休憩スペースになったり、さまざまな形に姿を変えてお迎えします。(2025年2月以降予定)



※イメージ図

ギャラリー8、ギャラリー9

美術の広場側に、無料で入れる新しいギャラリーを2か所増設しました。ギャラリー9はガラス張りとなっていて、美術館の外からも作品をお楽しみいただけます。



美術の広場に面したオープンスペース

美術館の外にもオリジナルデザインのテーブルやベンチを設置します。オープンスペースで美術館とみなとの風を感じながらくつろぐことができます。(2025年2月以降予定)



小さなお子さんも安心できるスペース

館内の授乳室を増やし、調乳器を新たに導入しました。2025年2月以降には、リラックスしながらお子さんと一緒に楽しめるエリアも新設。家族みんなで安心してご来館いただけます。



大しかく看板

集会所の目印にもなる「大しかく看板」を新たに設置しました。美術館の入口で展覧会情報などをわかりやすくお伝えしながら、みなさんを館内へと誘います。



エレベーターの新設

グランドギャラリーに透明で開放感のあるエレベーターを新設しました。新しいルートで展示フロアまで上がることができるようになりました。

オリジナルデザインの家具

さまざまな障がいのある方と共に行ったインクルーシブワークショップを経て、あらゆる人にやさしいデザインになることを目指した、横浜美術館オリジナルの家具をつくりました。当館に多く使われている御影石から抽出した色を使っています。(2025年2月設置完了予定)

美術図書室

休館前の「美術情報センター」が地上階へ移り、明るい光がそそぎこむ新しいスペースに生まれ変わります。アートにまつわる絵本から専門書まで、どなたでも無料でご利用いただけます。(2024年11月開室予定)

リニューアルに関わったクリエイターたち

ミュージアムメッセージ

国井美果

「みなとがひらく」というミュージアムメッセージは、一見とてもシンプルです。「横浜」で「みなと」、それは単に日本を代表する港町にある美術館だからというだけでなく、横浜美術館にしか言えないことを探った結果でもあります。館の新しい基本方針を定めた美術館のみなさんの胸には、これからの横浜美術館はよりいっそう、どんな人にもひらかれた場になるという強い意志がありました。それは美術館そのものがみなとであり、そこを訪れる人もまた、無限の可能性がひらくみなとであると言える。「あなたというみなとが、どこまでもひらく場所」でありますようにというその想いをまっすぐ、メッセージに表しました。港町にあるという宿命から逃げずに、何度も議論を重ねて強くしていきました。ここを訪れる人も、ここで働く人も、関わるすべての人にとって自分ごととなるメッセージであるといいなと思います。



国井美果 くにい・みか

コピーライター。コーポレートメッセージや企業広告、ブランドをつくる・磨くなど、社内外をつなぐさまざまな言葉やアイデアで企業や社会の活動に関わっている。主な仕事に、資生堂「一瞬も一生も美しく」、伊藤忠商事「ひとりの商人、無数の使命」、絵本『ミッフィーとほくさいさん／美術出版社』など多数。

空間構築、サイン計画

乾 久美子

設計者・丹下健三が使った御影石に埋め込まれているさまざまな色を抽出し、オリジナルの什器をつくりました。横浜美術館の特徴である巨大な天窓が修復されたことをいかし、自然光の下で石の色と什器がお互いに引き立てあい、和らいだ雰囲気漂う場所を目指しました。入ってすぐ正面の「まるまるラウンジ」にはいろいろなサイズのテーブルと椅子を揃え、ひとりでも、みんなでいても居場所と感じられる場所になればと考えました。また、ユニット化した什器はシーンにあわせて組み合わせが変えられるようになっています。什器の制作にあたっては、さまざまな障がいのある方たちと共にインクルーシブワークショップを実施しました。原寸大のモックアップを試しながら知見を得るといった貴重な機会がなければ生まれなかった家具もありますので、オープンを楽しみにしてください。



乾 久美子 いぬい・くみこ

1969年大阪府生まれ。2000年乾久美子建築設計事務所を設立。2016年より横浜国立大学都市イノベーション学府・研究室 建築都市デザインコース (Y-GSA) 教授。代表作に、みずのき美術館、宮島口旅客ターミナル、釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館など。

空間構築、サイン計画、リニューアルロゴ

菊地敦己

サインやポスターなどのグラフィックデザインを手がけています。また乾久美子建築設計事務所と協働して空間のデザインにも取り組みました。新しい美術館を立ち上げるのとは違い、既存の美術館建築やこれまでの活動を捉えた上で、どのようにアップデートしていくかが課題でした。グランドギャラリーの階段は片側が四角、もう一方は丸をモチーフにした空間が特徴的です。新しいマークは、既存のマークの四角を同じ面積の丸に置き換えたもので、隙間がある風通しの良い組み合わせになっています。もともと存在する形が変化して、ひらいていく。このことは、横浜美術館がリニューアルで目指していることの象徴でもあります。また、「YOKOHAMA MUSEUM OF ART」などのタイポグラフィにも、四角と丸を組み込み、違う形やイメージが同居しながら調和することを目指しました。



菊地敦己 きくち・あつき

1974年東京生まれ。2000年ブルーマーク設立、2011年より個人事務所。ブランド計画、ロゴデザイン、サイン計画、エディトリアルデザインなどを手掛ける。とくに美術、工芸、建築に関わる仕事が多い。主な仕事に、青森県立美術館やPLAY! MUSEUMのVI・サイン計画、ほか多数。

リニューアルオープンまでの流れ／オープン後の予定

リニューアルオープンまで

2021年3月1日	大規模改修工事のため全館休館
2021年7月	横浜美術館から事務所撤去、仮事務所へ移転 空間構築に向けての職員プロジェクト、館内ワークショップを開催
2021年9月	以降、主な休館中事業として下記を展開 ・仮事務所PLOT 48を拠点にワークショップ等を行う「やどかりプログラム」 ・横浜市内18区の文化施設等にアート体験を届ける「横浜 [出前] 美術館」 ・工事用仮囲いを活用した若手作家紹介企画「New Artist Picks: Wall Project」 ・オンラインを活用したプログラムやコンテンツの配信 ・工事用仮囲いを活用した市民協働参加型プロジェクト「みんなと、いろいろ、みなといろ」
2021年10月1日	大規模改修工事着工
2022年6月	空間構築設計を乾久美子建築設計事務所、サインおよびグラフィックを菊地敦己事務所に決定
2022年10月	空間構築のためのインクルーシブワークショップ開催
2022年秋	ミュージアムショップ、カフェ運営事業者決定
2023年3月	国井美果氏によるミュージアムメッセージ、菊地敦己氏によるリニューアルロゴ決定
2023年11月	公式サイトをリニューアルオープン
2023年11月30日	大規模改修工事竣工

リニューアルオープン以降 (予定)

2024年3月15日	リニューアルオープン 「第8回横浜トリエンナーレ」開幕
2024年6月9日	「第8回横浜トリエンナーレ」閉幕 以降、約13,000点の横浜美術館コレクションを外部倉庫より収蔵庫へ
2024年11月	開館35周年 じゆうエリア一部オープン ギャラリー8、ギャラリー9、市民のアトリエ、子どものアトリエ、美術図書室、レクチャーホール、ミュージアムショップ、カフェをリニューアルオープン 以降、部分開室エリアにてイベント等を開催
2025年1月	全サインおよび家具設置完了
2025年2月	全館始動
2025年2月ー6月	「おかえり、ヨコハマ。」展、横浜美術館コレクション展開催 かつて「ヨコハマ」を生きた、そしていま「ヨコハマ」を生きる人々の多種多様な声に耳をすませます

横浜美術館の建築について

横浜美術館は、日本のモダニズムの巨匠と称される建築家・丹下健三（1913－2005年）の手による建物です。生涯で民間公共あわせて400ものプロジェクトを手がけた丹下が国内で初めて美術館^{※1}として設計したのが、横浜美術館^{※2}です。

左右対称に長く伸びるファサードをもつこの建物では、あちこちに丸や四角のモチーフを見つけることができます。外壁の「フォルス・ウィンドウ」（にせ窓）や、広大なエントランスホールである「グランドギャラリー」に配された大階段のほか、展示フロアにもひととき印象的な円形と正方形の展示室があります。

御影石をふんだんに使った開放的な「グランドギャラリー」は、最頂部約16m、左右約63m、奥行き16mの大空間です。ガラス張りの天井からは開閉式のルーバーを通して自然光が採り込まれ、季節や陽の光のうつろいを感じることができます。

丹下は設計時、市民の交流や文化活動の拠点としての美術館を目指していました。作品を鑑賞する前にたたずんだり、展示室から展示室へと移る間にひと息ついたりするための「目的を明確にもたないスペースこそが大切だ」と語っていたといいます。そ

のため横浜美術館には、「グランドギャラリー」を筆頭に、ひとびとが自由にときを過ごすための特徴的な空間がいくつも設けられているのです。

丹下は代表作の多くを「都市の中にどのように建築があるべきか」という視点で構想し、建物の内外にしばしば「広場」をしつらえました。横浜美術館もまた、「みる」「つくる」「まなぶ」だけでなく、思い思いの目的を持つ多種多様なひとびとが集い、共に過ごすための「広場」としてつくられているのです。

※1 現・倉敷市立美術館は、丹下が倉敷市庁舎として設計（1960年竣工）し、その後美術館に転用された建物。

※2 建物は、1989年3月から開催された「横浜博覧会」のパビリオンのひとつとして使用され、博覧会終了後の同年11月に横浜美術館として正式に開館。

丹下健三 たんげ・けんぞう

1913年大阪生まれ。1938年東京帝国大学（現・東京大学）工学部建築科を卒業。ル・コルビュジエに傾倒しその教え子である前川國男の建築事務所に入る。1941年同大学大学院に入学。卒業後、1946年から1974年まで母校で教壇に立ち、1987年には建築界のノーベル賞とも言われるプリツカー賞を日本人として初めて受賞した。2005年3月没。代表作に、広島平和記念資料館、香川県庁舎、国立代々木競技場、東京都庁舎など。



開館間もないころの横浜美術館 ©村井修



丹下健三（1986年／撮影：齋藤康一）



横浜美術館 大規模改修工事

1988年の竣工以来30年が経過し、施設や設備の老朽化が進んでいる横浜美術館の長寿命化を図るとともに、エレベーターの増設や多目的トイレ等の整備によるバリアフリーの向上や、収蔵庫の増設などの機能向上工事を実施しました。

主な改修内容

- 1 長寿命化対策工事等
 - (1) 電気・衛生・空調等の設備更新
 - (2) 外壁等の経年劣化改修
 - (3) エレベーター、エスカレーターの更新
- 2 バリアフリー工事
 - (1) トイレ改修（多目的トイレの増設等）
 - (2) エレベーターの増設
- 3 機能向上工事
 - (1) 美術品・資料の収蔵庫の増設
 - (2) 展示環境の改善
 - (3) 美術図書室（美術情報センター）の移設

工事概要

工事期間 2021年10月から2023年11月（一部2024年1月）
発注者 横浜市にぎわいスポーツ文化局（発注当時：横浜市文化観光局）
監督員 横浜市建築局
設計者 株式会社丹下都市建築設計
施工監理者 株式会社丹下都市建築設計

施工者

清水・小俣・三木建設共同企業体（建築）／川本工業・ヨコレイ・関東設備建設共同企業体（空調設備）／共栄・シンデン・矢口建設共同企業体（電気設備）／エルゴテック・杉山管工建設共同企業体（衛生設備、消火設備）／富士電機株式会社（特別高圧受変電設備）／東芝プラントシステム株式会社（自家発電設備）／東芝エレベータ株式会社（昇降機設備）／横浜エレベータ株式会社（昇降機設備）／株式会社小俣組（内装改修、外装改修）／株式会社東和エンジニアリング（舞台音響設備）／京浜電設株式会社（舞台照明設備）

横浜美術館リニューアルオープン プレスリリース

2024年1月発行

デザイン：菊地敦己
写真：新津保建秀
イラスト：乾久美子建築設計事務所

発行・お問合せ：
横浜美術館（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）
広報担当 福山、山本、高橋
Tel. 045-221-0319 Fax. 045-221-0317
pr-yma@yaf.or.jp
〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1
<https://yokohama.art.museum>